

## 地域研究で突出していたアメリカ科

第3期（1955年卒業）小宅 庸夫

今から六十三年前の頃を思い出している。投稿の求めに応じてアメリカ科進学時代を振り返っているからだ。

私にとってそれは偶然と消去法の結果であつた。駒場で二年目を迎え後期課程の進学先を決めるさいに教養学科を選択したのは当時の記憶ではごく自然な成り行きと思われた。正直なところ、駒場の授業には外国語のクラス以外はあまり出席しない学生であつた。講義をする教授の書いた本を読み、それに匹敵する他大学の先生の著作を乱読しては自分なりに知識の整理を試みていた。大教室での講義には関心が湧かず、優れた先生による対面指導と先生との知的交流対話を強く求めていた。大学は知識を深めその幅を広げるための場であり、外国語の知識が必須と考えて英語のほかにフランス語の勉強にもものめり込んだ。アメリカ映画を何とかフォロー出来るようにと努め、同年代の大学生が都内でアメリカ人を招いて定期的に催していた討論グループの常連であつた。文学の才能なく、法経学部に着かれないので消去法で教養学科進学となった。

教養学科はその頃まだ卒業生を出していない新制東大唯一の新設学科であつた。多少の不安はあつたが、駒場で接したガイダンスなどを聴いて納得したのであろう。何人かの先輩が指摘していたように教養学科の教授先生方の説明に感動した記憶はないが、旧制一高の伝統を継ぐ教育方針を理解し賛同していたので自然に受け入れた。

二年二学期になって、国際関係論科進学を前提に二年生にも開放されたクラスに出席したところ、教室こそ小さかったが体裁と中身は大部屋での講義と大差ないことが分かった。また、当時の指導教官の政治的立ち位置にも疑問を感じた。これが三年生になる前にアメリカ科進学を決めた理由である。数ある地域研究科の中でアメリカ科は社会科学方面に特化し、その地位は突出していた。

アメリカ科売り物の中屋健弑先生担当アメリカ史のクラスは充実していた。指導は厳しく、お叱りを見舞われぬため最大限の防御と警戒が必要であつた。毎回、部厚い洋書をぼんと渡され、指定された部分のさわり（著者が言わんとする点）とそれに対する所見を短くまとめて提出する宿題は大変であつた。しかし、今にして思えばこの苦労はわが人生経験には大いに役立った。中屋先生のおかげであり今も深く恩を感じている。後年、外交官として国連その他の国際会議を担当したさいに大冊の会議文書に接しても驚かなかった。その中からわが方に関係する問題点を摘出し対処方針を起案するには中屋教室での体験が役立った。

アメリカ科では教授との対面指導に恵まれた。指導教官の中屋先生から教室の外でいただいた数々の忠告と指導には今でも頭が下がる。暖かく私を見守り指導して下さい。

齊藤真先生のアメリカ政治、一橋の小原敬士教授のアメリカ経済、ボールス先生の文化人類学、前田陽一先生のフランス文化、東銀（当時）村野調査部長の国際経済など個性ある先生の優れた講義に恵まれた駒場最後の二年間であった。

法律政治経済の専門科目を勉強しながらアメリカ科でアメリカの歴史文化をたたきこまれたことは、卒業後外務省に入ってから大切なアセットとなった。四十年に及んだ外交官生活を通じてアメリカ人の同僚は国際機関、アジア、中近東、ヨーロッパ、南米と勤務地を変えても大切な友人であった。有名な書物“菊と刀”に示されるようにアメリカ人特有の独善的（良い意味のひとりよがり）思考に、たまには、悩まされることはあっても、そこはボールス先生から教わった文化人類学の素養が少しは役立った。世界の国と民族は固有の歴史文化と独自の思考方法を有している以上、国際問題の処理に当たっては我々日本人との間で相互理解と立場の調整妥協は不可欠のプロセスである。グローバリゼーションは進んでも、国と民族の壁は残る。教養学科時代の薫陶のおかげである。

卒業後六十年を経て世界は大きく変わった。日本は復活して強くなったが、停滞期を迎え、アメリカの力は依然強大でも相対的には衰え、中国とイスラム系諸国が力をつけた。米ソ冷戦終結後四半世紀を経て、世界はこれから新しい秩序とチャプターを求め始めたようである。歴史は繰り返すのであろうか。これから世界が地殻変動を遂げる過程で日本がどのような役割を果たすのか、現在の地位を保ってゆけるのかが問われている。これは日本と言う国家と日本人自身の適応能力の有無と高さ如何にかかっており、国論をどの方向に収斂させ得るか否かと裏腹の課題であろう。日本を取り巻く環境は、見方によっては、明治維新前の日本と重なり合うところもあるのではないか。これからの日本を背負う政治家、メディアと次世代の青年、学生に期待したいものである。